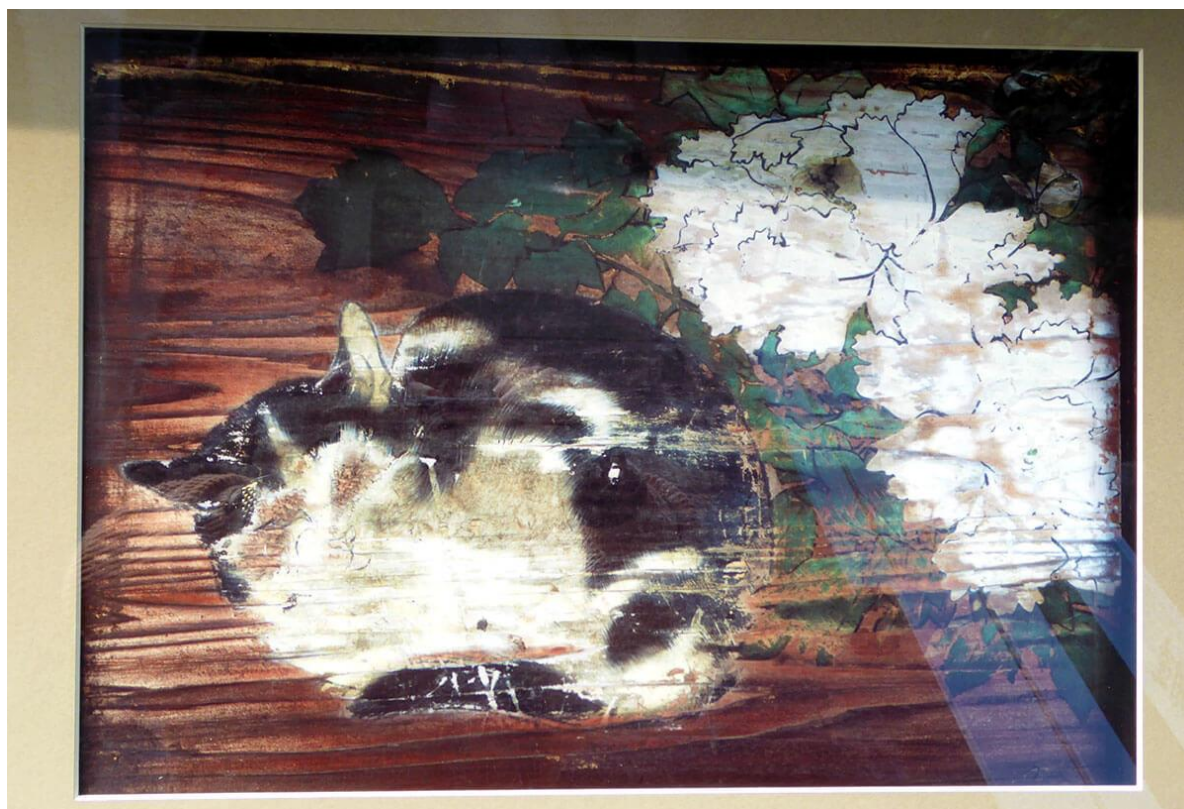


### —絵馬 「浮かれ猫」—

京・千本出身の「光清寺」の鎮守弁天堂に、牡丹の花のもとにやすむ猫と花に舞う蝶が描かれたふしぎな絵馬があります。江戸時代のある夜、近辺の遊里から弦歌の音が聞こえてくると、その節につれて猫が絵馬から浮かれ出し、女性の姿に化けて踊り舞い始めたのです。それを見た人がいたらしく、世に「浮かれ猫」と言いはやされるようになりました。時の住職松堂和尚（当山5世、1811年示寂）は不快に思い、法力で「浮かれ猫」を絵馬に封じ込めてしまいました。その夜、衣冠装束に威儀を正した武士が住職の夢に現れました。「私は絵馬の猫の化身です。あなたに封じ込められて不自由に耐えられません。今後は軽はずみをつつしみますので、なにとぞお許してください」と嘆願しました。和尚は哀れに思い封を解きました。その後異変はなかったが、この話はいつそう世に広まり、人気商売に利益ありとされ諸芸上達を祈願する祇園・島原の名妓等が参拝したそうです。この界限に伝わる「出水の浮かれ猫伝説」です。  
(光清寺保存資料より)



\*\* 「浮かれ猫」の絵馬の由来や作者、伝説が生じた年代の確証はありません。この伝説は確かな根拠のない幻のような民間伝承の類いです\*\*

{光清寺}

京都千本出水の光清寺は寛文9年（1669年）に臨済宗のこう山義洋禅師を開山とし、皇族の伏見宮貞致親王（ふしのみやさだゆきしんのう）が御生母慈眼院殿心和光清大信女（じげんいんでんしんわこうせいだいいんにょ）の菩提のために、宮家御領地に建立されました。宝永3年（17063年）に定致親王のご子息邦永（くになが）親王が改めて御祖母の法名をもって寺号とし、心和山光清寺と称するに至ります。その後、明治初年に臨済宗建仁寺派に所属することになります。

